

目白三平の海外旅行

中村武志

なかむらたけし
中村武志 1909年（明治42）長野
県生れ。法政大学高業師範部卒。
大正15年東京鉄道局に就職。職務
のかたわら「目白三平」を主人公
とするサラリーマン作家として活
躍。昭和39年3月31日国鉄本社厚
生局厚生課課長補佐をさいごに定
年退職。作家生活に入り、同4月
海外旅行。

目白三平の海外旅行

定 価 250円

昭和39年11月25日第1刷発行

著 者 中村武志

発行者 朝日新聞社 浜名二正

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 東京 北九州 朝日新聞社
大阪 名古屋

コンパクト・シリーズ
45

目白三平の海外旅行 中村武志

朝日新聞社

目次

出発までの日々

作者の私は疲れていた	9
目白三平と作者のちがい	12
スミス君の高邁なる精神	15
ついに為替自由化	18
旅費不足三十万円	23
女房から材料費を請求される	25
蒸し返しの金時計	30
目白会から両親の送別会まで	33
どくとるマンボウ氏の助言	36
古谷綱武氏の忠告	39
吉沢久子さんの注意	40
チャーチル会幹事長氏の勧告	41

トイレット部長氏のアドバース	43
前国鉄技師長のすすめ	44
バレリーナ福田淑子さんの希望	45
堀鍵店主人の鍵についての予備知識	46
松島雄一郎氏のたった一言	47
宮田武彦画伯の教示と遠メガネ	48
江上校長選定のヨーロッパ優秀料理	50
海外旅行部中央営業所長の注意	52
中央鉄道病院大木先生の解釈	54
檜崎先生選定の海外旅行用携帯薬品	56
音なしの構えで気楽に	58
太田画伯にならって	62
携帯品のかずかず	64
愛情と生命保険の関係	68
芸術関係者懇親パーティー招待状の効果	71
同行者の顔ぶれ	74

総理大臣へのメッセージ	78
-------------	----

税関案内	81
------	----

ヨーロッパの日々

待合室で生活したい	84
両手に花	85
いずこも同じBG気質	88
ローマの出勤風景	92
豊かな昼食	95
ホテル・メトロポールの洗い桶	98
靴磨き屋とマーケット	101
美しいローマの一夜	104
ローマのアパート探し	106
ローマ案内	111
ナポリ・ポンペイ案内	115
イタリアの味覚	117

チューリヒの奥さまと踊る	118
スイスの実用時計	122
ピラトス山観光	125
チューリヒのゴミ箱	125
チューリヒ案内	130
ルツェルン・ピラトス案内	131
スイスの味覚	131
ドイツの女房は世界一	132
フランクフルト案内	136
ハイデルベルヒ案内	137
仲人の家庭調査	139
フランス版目白三平	146
プロトー氏の領地	152
貧乏性のパリ見物	157
花のパリでパンツの洗濯	159
夜中のビデ事件	162

洋服ダンスのベッド	165
パリ案内	169
パリの味覚	174
日本の亭主と女房は幸福	175
イギリス版目白三平	179
イギリス亭主の嘆き	182
ロンドンで外貨獲得	186
全スト・ショーと女房の服地	188
国鉄職員はどこでもサラリーが安い	192
ロンドン案内	193
ロンドンの味覚	197
デンマークの内職	197
コペンハーゲンのボール流し	200
孫悟空日本へ帰る	202
コペンハーゲン案内	204
コペンハーゲンの味覚	206

写真

丸茂	折茂	中村
慎一	伸平	武志
長谷川	秦	
巖	志郎	

出発までの日々

■作者の私は疲れていた■

私は記憶力がとぼしい。だいたい貸したお金のこと以外は、何もかもきれいさっぱり忘れてしまふほうである。

その私が、海外旅行を申しこんだ三年前、昭和三十六年一月十二日のことを、今でもはっきり覚えているのは、新聞広告の切抜きが手許にあることと、ものを書くことがすっかり嫌になり、困惑していたころであつたからである。

三年前のそのころ、国鉄に勤めながら、内職に随筆や小説を書き続けていた私は、とても疲れていた。ほかの作家にくらべて、量はごくわずかなのだが、才能とぼしく、不器用なゆえに、せ

いいっぱいの努力をしなければならなかった。二足のワラジだから、いいものが書けないのだな
どと言うのは、自分を誤魔化す言葉に過ぎない。才能のある作家は、二足であろうと、三足であ
ろうと、いい作品をいくらでも書き飛ばせるのである。

文学というものにかじりついていなければ、生きていられないというような書き方ならば、そ
んなに疲れるはずはないし、たとえ疲れたとしても、その芯しんには、疲れた体をしっかり支えてく
れるものがあるわけである。

残念ながら、私にはそんな立派なものもなかった。ずっと以前、まだ商売にしないころは楽し
かった。趣味として書きたい時に書いていたころは、できあがった時の喜びというものはまた格
別なものであった。それがお金になりだすと、私は、すっかり墮落してしまった。そして今度
は、お金のためにしか書かないようになって行ったのである。その挙句あげく私は、国鉄のサラリーが
少ないから、内職をしているんだと心の中で呟つぶやき、また、外に向かっても弁解めかしくそんなこ
とを言いだしていたのである。

書くことに慰めが得られぬのだから、疲れるのは当然である。今時はどんな大家でも、いわゆ
る通俗小説を書かなければ商売にならない。それゆえ、日ごろは、新聞、週刊誌、雑誌に、読者
のご機嫌をうかがって、面白く楽しい小説を書き続けている。しかし、一年に二、三回は、純文

学雑誌に、批評家が絶賛するような作品を書くのである。その大家は、思いきり読者を無視して、ご自分が書きたいことを十分に書きこんだ純文学作品を発表した結果、ほっと安堵し、なんとなく救われた思いをしているにちがいない。

ひたすらお金のために書き続けていた私には、そういう救いがなかった。私が、どんなに自分自身をいやらしく思い、そのために疲労していたか知れないのである。

大袈裟^{げさ}だけれど、こういう心境にあった昭和三十六年一月十日の朝刊で、私は次のような新聞広告を読んだのである。

三年後の夢——世界一周四十七日間

「自由に海外を旅行したい」というのは、誰もがもつ希望です。貿易、為替の自由化が、着々すすめられている現在、海外旅行のできる日も近づきました。

四井信託銀行では、最近日本交通公社と提携して、「海外旅行信託」をはじめました。

いちばん有利に、旅行費用を積みたて、また安心して海外旅行を楽しむために、海外旅行信託をぜひご利用下さい。

この海外旅行信託にお申しこみになった方は、自動的に日本交通公社の「海外旅行会」の会員

になります。そして、渡航前の面倒な手続きや、海外旅行のご案内は、日本交通公社の熟練した係員が終始お世話いたします。はじめて海外旅行をなさる方もなんの心配もいりません。一応の予定は、三年先の昭和三十九年として、為替管理が緩和され、海外旅行が可能になった場合実施するもので、もし目標の昭和三十九年になって、まだ事情が許されない場合は、延期するなり、その他の措置について、別途ご相談申しあげます。

四井信託銀行のこの広告を見た私は、

“昭和三十九年と言えば、俺が定年で退職する年ではないか。近ごろ疲れがはげしいが、こんな調子で行けば、三年後の三十九年になったら、へとへとになってしまうんじゃないかな。そうだ、定年と同時に海外旅行をして、長いサラリーマン生活の疲労をいやし、第二の人生へ元氣よく出発することしよう”

と思わず呟いたのである。

■目白三平と作者のちがい■

その時、私の心をちらっとかすめた思いがあった。“とにかく、女房には内助の功があったと

言うべきだ。安い国鉄のサラリーだけで、長い間家庭経済をヤリクリして来たんだからな。せめて、定年後の海外旅行には一緒につれて行くべきだろう”

ここで読者の皆さまは、ちょっと不審の念を抱かれるにちがいない。「安い国鉄のサラリーだけで家庭経済をヤリクリして来たんだからな」というと、それでは、二足のワラジをはいて稼いだ内職収入は、いったいどうしたのだろうという疑問をお持ちになるのは無理からぬことである。

拙文に登場する主人公の国鉄職員目白三平という人物は、謹厳実直で、多少女房に敷かれ気味のところで、日々を過ごしている。仕事のこと以外は、だいたい彼女のご許可を得てから行動するという好人物である。

もちろんサラリー袋も封をきらずに渡し、小遣いとして、その一〇%をありがたく頂戴している。もともと安いサラリーなのだから、一〇%ではとてもやれるものではない。時にはヘソクリを作るのだが、それがまた哀れなほどわずかなものである。

ところで、目白三平の作者のほうはどうであらうか。信州の農家に生れた私は、古風な祖父の手で育てられた関係で、実直で誠実な人間である。いや、それは目白三平のことであって、私のほうは、いささか融通のきかない単なる田舎者と言うべきである。目白三平と作者の私とは、こ

んなところが、多少似通っている。その他はほとんどちがっているのである。

たとえば、私は内職収入があるまでは、サラリーもボーナスも袋ごと女房に渡したことがなかった。適当な額の小遣いを、先に頂戴してから女房に渡すという主義であった。しかし、今こゝで弁解するのではないが、自分でも限度をわきまえた良心的なヘソクリをして来たのだという自信がある。煙草代、コーヒー代、それから勤め先で、あいつケチな野郎だと言われない程度の小遣いを先にいただいただけのことである。

次に内職収入の処置についてお話ししたい。思いがけないキッカケで、十年前から内職に売文をはじめた。作家志望で、二十代から修業を積み、四十五歳になって、はじめて商売をしだしたのではない。ある日突然に、趣味が実益を生み出したのである。

そこで私が考えたことは、「目白三平もの」が売れだしたのは、極めて一時的な現象である。ずぶの素人作家が、玄人作家の仲間入りなどできるものではない。石橋をたたいて渡る主義の私は、自分の作家としての生命を、せいぜい半年か一年だけであると予想したのである。

それゆえ、現在はいって来つつある原稿料、印税、原作料を家庭へ注ぎこんで、長年かかって漸く確立した中村家の生活ペースを崩してはならない。一時的な現象で、生活水準を高めてはならないのである。

たった半年か一年の間だけ、女房や子どもに贅^{ぜいたく}沢な生活をさせておいて、さて内職が駄目になったから、元の貧乏ぐらしに戻れということは、誰が考えても無理な話である。

あれこれと思索した挙句、女房の非難を甘受して、内職収入は、いっさい私が浪費する決心をかためた。半年かせいぜい一年の間、贅沢に馴れ親しんだ私は、作家稼業が駄目になった時、どんなにか寂しい思いをし、苦勞をし、果ては、世をはかなむことにもなりかねないのである。それだけは、女房や子どもには経験させたくない。苦しむのは私だけで結構であると考えて、内職収入はすべて私が使うという内職収入の処置に関する大原則を定めたのである。

■スミス君の高邁なる精神■

この大原則を実行に移す前に、無駄だとは思ったが、それを説明して、女房の諒解^{りようかい}を求めることにした。予想通り、彼女はふんと鼻で笑って、私の考えを受けつけてはくれなかった。こういう深遠かつ高邁^{こうまい}な考えというものは、女房には絶対に理解できないことのようにであった。

そこで私は、私などとうていおよぶべくもない高邁な精神の所有者、イギリスのサラリーマンレイモンド・スミス君の話をしたのである。

「イギリスのランカシャーの製図工で、レイモンド・スミス君という人がいるんだ。彼が三十歳